

文學博士 三宅雄次郎君序  
大僧正 本多日生師著

# 法華經講義

洋裝全二冊貳千頁  
正價金四圓  
特價金參圓  
內地郵稅金貳拾錢  
臺灣韓八百多迄的小包料

## 次 目

- 序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- 第一節三種教相の綱格 ●第二節十雙權實の巧釋 ●第三節六重本迹の法華經觀 ●第四節天台の法華經觀
- 第二節待絶二妙の解釋 ●第三節一念三千の妙觀 ●第五節日蓮の法華經觀 ●第六節信成佛の要道 ●第五節究竟
- 第三節合用實の活斷 ●第四節應身常住の妙義 ●第五節佛界緣起の妙旨 ●第五節要道 ●第九節
- 第四節聲色爲經の眞義 ●第七節唯一本尊の光顯 ●第八節信念成佛の要道 ●第五節要道 ●第九節
- 第五節十節當教相の眞目 ●第十節法華經の科段 ●第四節悉檀運用の活釋 ●第五節天台講經要義 ●第九節
- 第六節五重玄義の妙解 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五支 ●第八節文々四釋廣
- 第七節蓮講經の要義 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五支 ●第八節文々四釋廣
- 釋の概略 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- 譯文 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- 參考 ●讀唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也  
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町  
振替東京一二一九

統一團

信念と努力  
教育と宗教

大成丸船長 小關三平  
大僧正 本多日生

人生は奮闘の舞臺也

三上義徹

盲啞白痴の救護

子爵五島盛光

經典閑話

笹川日堂

# 統一

號六十二百二第

▲宗教大會の所見  
▲ヘルシヤ灣通信

海外先宣 驅日持上人靈蹟探檢

花木即忠



# 縮妙法華經並開結

第壹種 紙裝 正價金貳拾錢 郵稅金四錢  
 第貳種 布裝 天金 正價金四拾五錢 郵稅金六錢  
 第參種 皮裝 三方金 正價金八拾錢 郵稅金六錢

法華經は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸、思想統一の最高指針なり、現代思想界の紛亂其極に達し、結歸する處を知らざるに當りては、須らく法華經の研鑽を獎勵せざるべからず、然るに世流布の經典其類多しと雖ども、或は其價貴く、或は携帶に不便に、或は文字細微に過ぐる等、求道の士をして満足せしむるものなし、仍つて本會は此等の不利不便を除き、菊半裁判として携帶を便にし且其價を廉にし以て汎く一般に供給し本經の普及を圖らんとし茲に之を出版す、希くは諸士本會の趣旨を贊助せられ本書の普及に御助力あらんことを

發行者 法華經普及會

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 一團

主 張



## 人生は奮闘の舞臺也

人生は戰ひの舞臺である、こゝに戰ひつゝ吾々の生活を擴大し、生活を豊富にせんとする、さればあるものは包容し、あるものは拒斥し、新舊の思想を調和しつゝ發展せんとして奮闘力闘する、それが現代の人の生活上の事實でなければならぬ、たゞ徒らに人生を白濁冷視して、何等の要求もなければ憧憬もない生活は其は未だ人間根本の生活に這入りて居らない、いつまで経つても内部生活は貧弱で悲痛極まりもない、不安煩悶の悲調を帯びた生活は、人生に何等の意義を持たない、各人の生活は人生の意義と眞實とを探ねんとし、不斷の努力を存する、即ち其使命は精神的活動にある、善くとも悪くとも自己には影響がないと冷かに澄して居るものもあらうが、それ等は習慣の俘虜とな

つて姑息なる平和に眠らんとするので、却つて人を神經衰弱に導き、癩癩に赴かしむるばかりである、人生は斯かる不徹底なるものでない、飽くまでも生々たる奮闘の活舞臺である、而して各人はみな奮闘の勇士である、されば吾々の生活が休まない限り、常に道德的權威を握みつゝ、自己の力に一鞭を加へて激濁たる生の創造に奮闘せずには居られない、而かも其奮闘や、實生活に近づいて生存の塵埃裡に跳り込み、人生の發展を阻害せんとする思想と奮闘するのである、自からその奮闘に勇み悦んで、人全體の爲に勇猛精進する、法華經の譬論品に説ける  
 「常無懈倦一恒求善事二利益一切」  
 と云ふ殉教の態度がなければいかぬ、近代思想の根底



に宿れる個人主義や功利主義や、或は偏狭の現實主義に囚はれて將來の天地を否定するが如きは、則ち是れ現實を否定して暗洞へ投り込まんとする毒想で、却つて自己の生を怠りするものである、人は現在に於ける生の豊當を充たして、さらに未來の天地を開拓せずんば己をさるもの、現在の實人生に對して不安と煩悶を見出すのは、明かに局限せられたる小天地のみでなく、廣い大きい理想の未來あることが、既に内部生活に於て信じて居ればこそである、されば眞實なる生活の道を開かなくては、あらゆる方面に折伏的戰鬥を挑むのである、吾々の肉としての生活は苦しみもあるが、内部生活の上には道に勇んで生甲斐あるに悦ばざるを得ない、こゝに必ず常套的なる生活の夢を破り來りて、正しき意味の信仰生活に目の覺めた奮闘者となり得る、斯くして始めて日蓮上人の如き、奮闘的思想を受け入ることが出来る、上人の六十二年は戰ひの生涯である

「如何に強敵重なるとも、努々退く心なく、恐るゝ心なかれ」

「日蓮其身にあひあたりて、大兵を起して二十餘年、日蓮一度も退く心なし」

いかに其奮闘振りの勇壯にして剛毅なるよ、けれども上人の戦ひは、劍を提げ兵を率へて敵陣に突撃したのではない、彼の現世を否定したる厭世主義や、又は功利獨善の思想や、實人生を茶化して風教を掻き亂し、人生から深き意義を奪ひ取りて、薄暗く冷たい洞穴に引寄せて終ふ、何條人生全體のために奮闘せず居られようか、上人が思想の荒廢を慨いて敵陣を衝いたのは、蓋し人生の内面に愛と光と生の道を與へんがためであつた、奮闘は妥協的でない、徹底的色讀主義である、奮闘の存する所、節義あり努力あり向上あり創造あり、而してこゝに人も國も悉く發展し充實し理想化し得る、人生は愈々奮闘である、吾々日蓮主義者は孤軍重圍を破りて現實生活の渦卷の真中へと、この一身を投げ込んで奮闘生活を送るのを幸榮とする

「されば我弟子等心みに法華經の如く身命も惜まず修行して此度佛法の定否を心みよ」

談 公



# 教育と宗教

大僧正 本 多 日 生

教育と宗教との關係は、我國に於ては未解決の問題であると思つても宜しからうと思ふ、教育と宗教とは衝突すると云ひ、相當の學者が斯かる意見を發表致しましたから、多數の教育家は此の主張に賛成を表したのてあります、今日も尚ほどう云ふ考に居る人が尠なからん様に思ふ、又他方には宗教家夫れ自身に於ても宗教の立場は教育と違ふから、何處迄も宗教は宗教として任意の行動を執つても宜いものだと云ふ主張をなすのであります、其が爲め教育と宗教の關係は色々な主意に於て論争せられまして、或人は學校の教育は全然宗教と分離しなければならぬが、社會の方面に於ては融和聯絡の作用を取らなければならぬ、其處に調和

點があると論じ、或人は宗教には歴史的發達ありて形式を備へて居るから、此の方面は調和することは出来ぬが、精神的宗教として形式を離れて宗教の實質に入つて考へて見れば、教育と宗教の調和は根底に於て行はる可きであると論ずるのである、又異なる方面に歩みつくあるや、互に能く牽制し合つて行く作用を有つて居る、例へば教育は國家を本位とするも宗教は人類を本位とし、又教育が社會を尊重する場合に宗教が個人性を主張し、教育が現世を尊重する場合に宗教が未來若くは理想を唱道する、斯の如くに反對の方面を辿りつゝ、宗教が理想に走せんとする場合には、教育が現實に引戻して來る、又教育が現實思想に依りて實



利の方面に走れば、宗教が金錢を卑しむ様に感化を與へて行く、丁度熱湯に水を注ぐやうなもので、教育に於て生活に必須の智識を與へ現實の思想が肉慾的に走れば、宗教は崇高なる信念を起させる、即ち牽制運動をやつて行く、其の間に人生の調節が圖らるるのである、教育と宗教とは兩立の必要ありとの議論も出て居るのであります、私の考は是等の説は何れも間に合せの主張であると堅く信ずるのであります、是等の主意より進んで誠實に教育と宗教との關係を研究して、此の二大感化の歸着を統一して行くべきである、と信ずる、此の間に正明なる大決定を與へねばならぬのである、多くの人はこの問題に關して今尙ほ不熱心の失を免かれなかつたと思ふ

前述の所論も一應の理由はあるやうなれども、其は尙に外面的皮相的な見解でありまして、少しく實質に立ち入つて教育と宗教との本意を考へて見ますれば、根本的に確乎たる一致點が発見されることと思ふ

さて教育と宗教との關係を一層明白にするには、如

何なる順序に論明すればよいかと考ふるに、今日の教育では智愴意の教育と云ふことになつて居りますから、この三方面に亘りて論明すれば頗る明白に相成ることと思ふ、故にこの順序を逐つて論じて見やうと思ふ

今日我國の學校教育に於て方針を立て、幼少の時から教へ、而して宗教に對する適當の智識を發達させて行くべきではなからうか、現下我國の學校教育の方針では之を許すか何うか、或は幼少の時から宗教を教へたならば迷信に傾き易いとして、智識を尊重する上からして之を不可なりと云はんか、宗教觀念を適當に發達せしむることは出來ないことだと思ふ、何せならば智識と云ふ其の中にはコンモンセンス即ち常識と、サイエンス即ち科學と、フキロソフキ即ち哲學とがあり、常識は常識としての價值あるも科學の智識に對しては常識は順はねばならず、又科學の智識も場合に依りては常識を尊重せねばならず、更に科學の智識は哲學の智識に依りて統一せられ、其の根據を與へられ、

哲學は科學より供給される材料を採用せねばならず、語を更へて云へば常識と云ふも譯の分らんものではない、科學に矛盾するを避け、科學と能く融合して常識の發達を圖り、以て此の常識を健全にして行かねばならず、又哲學の結論が智識の總計を支配して居るのである、而して現代の哲學は如何なる主義になり居るか、何人が唯物論を今頃主張しつゝあるか、世界の文明が驚らし來りたる智識は物心不二の心的一元でないか、何故に日本の教育に採用する智識をば今比唯唯物論に根據を捲えねばならぬか、そんなことを誰か定めたか、現代の教育は文明の進歩に打ち負けぬやうにして行かねばなるまい、此の場合に唯物思想などとは何事である

西洋の學問も皆活動的心的一元で、東洋の學問は無論のことである、儒教も天道明德を説いて天は生々化育の靈徳ありとし、天命を重んじ、斯くて宇宙には靈力ありとし、又我が神道に於ても天照大神の神勅より起りて我國家は成立して居る、我國の宇宙觀も又靈的

である、西洋の文明にては唯物思想の時代は二百年前のことである、斯かる十七世紀の古ぼけた智識を學校教育に於て今尙ほ智育の根底に置かねばならぬと誰か定めたのであるか、斯かる根本的智識は大學校で調べべきで、小學校には何等關係のない問題とするは大なる誤解だ、此の智識の結論を尊重して之を根據に据えて小學校の智育の根本に置かねばならぬ、若し之を深遠なることなりとして相關せずとならば、唯物的科學の結論も同じく高遠の問題だ、國民の大多數の者には小學校にて唯物的智識を授け、大學の中に文科の一小部分のみに心的一元の智識を與ふると云ふは如何なる譯なるか、是れ大に新考慮を要する所にあらずや、斯かる深遠靈妙のことは小學生には不必要なりと云ふか、是れ大なる迷想である、此の非常な靈妙なる意義を兒童の概念に與ふるの必要は充分に認められるのである、今日の學校教育は如何なる方針を執つて居るか、智識を啓發すると云ふことに於て根本方針を確立しないのではないか、現代の智識教育の根底は一定しない



のではないか、宗教と教育の關係は宇宙の靈力ありとの智識にまで進めば、宗教の神佛を信する人を嘲ける考はなくなるであらう、其であるから普識を啓蒙すると云ふ上に健全なる智育を理想したならば、宗教の信仰を尊重する考を生ずるは無論のこと、之が極めて人生上に貴重なことである。

夫れから意育の方面に於て論ぜんか、今日の青年學生は横着て困るとか、學問をした者が意氣地がないとか云ふ非難は殆んど定論であるが、何うも教育を受けたい人が弱い、斯の如くに教育を受けた者が弱いと云ふのは何が原因であるか、徳器を成就すると云ふ上からすれば教育は意育の上の大なる責任を帯び居るものではないか、此の意志の力を培養して行くには信仰を確立する事程大切なものはあるまい、然るに科學の智識に盲従して宇宙に靈があるかないかと云ふことすら判らないから、隨つて國體の淵源たる神聖の意義も、光輝ある歴史の妙旨も信ずることが出来ず、大切なことが何れも分らんと云ふやうな事になつて來る、爲に現

たからて、矢張り一種の宗教的信念を有つて居たので、天地の正氣と進退を共にする考で居た、此の宗教的觀念がない者は死んだら最期何も出来ないと言ふやうな卑怯未練の考のみが熾んに起るのである、何うしても人間に神聖なる勇氣を鼓舞作興せしむるには先づ信念を與へて、此の信仰の上に生命の不滅を信じさせるが根本問題である、何を苦んで生命の不滅を否定し、而して薄志弱行の徒を出すか、假に現代の研究では何人にも靈の問題が判らんと云ふならば、之を學校に於て肉體は死んでも魂は不滅であると定めて教へてもよいではないか、吉田松陰先生などのことを學校に於て教へる際に、靈が硯に宿ることなど教へたらよいではないか、戦死者の靈は招魂社に祀つて年々招魂祭を行ふて居るではないか、大典を以て戦死者の魂を祀つて居るのは、靈魂の不滅を信じて國家がやつて居る證據でないか、故に吾々が死んでも魂は滅びるものでないとして、此の觀念を明かにするやうに學校に於て教へることが何故出来ぬか、誰がそんなことを主張して學校

代の教育では強固な意志が立たない、勇氣も段々衰へて來るのである、一言て之を言へば信仰を與へざる所の科學のみに提はるゝから意志が弱くなるのである、故に國民をして勇壯果敢の元氣を興へんとならば信念を尊重せねばならぬ、そうなるに矢張り學說の上に於て宗教性を尊重する方針を確立しなければならぬではないか、即ち丈夫の精神を鼓吹する場合に於ては此の宗教性を籠めて來なくてはならなくなる、君國の爲に一身を捧げて盡すと云ふやうな場合になると、宗教性の籠つて居る崇高なる道義心に待たねばなるまい、即ち宗教信者は意志が極めて強くなる、一例を擧ぐれば日蓮上人が愈々斬られると云ふときに、頸を延ばして手を合せて心靜かに、此程の悦びを笑へよかしと仰せられたのは、全く宗教的信念の發露に外ならぬ、宗教の信仰なき人は人生の根本も、久遠不滅の生命も判らぬから弱いのである、彼の藤田東湖は死んだならば神となつて勤王の大義を果すと云はれて死を恐れなかつた、之は天地の靈氣と自己の生命の不滅とを信じて居

教育から靈の力を除いたか、國家大典の理由を學校に於て教へなかつたならば、將來大和魂を養ふ上に欠ける所があるではないか

次に感情教育の上に於て人の情を養ふとか、自然の美を樂むと云ふ感情の發達を謀るに就て、宗教が何う云ふ關係があるかを熟慮すべきである、自然主義の文學が起つては國民が段々墮落して居るではないか、藝術の方では新派とか云つて文弱の弊を助長しつゝあるではないか、又劇場に於ては卑猥なものを人が多く喜んで見るやうになつて居るではないか、之は國民の感情の墮落した證據である、藝術は感情のものであるから次第に崇高に導いたならば、自ら人間の感情を高潔ならしむることが出来ると思ふ、而して其の根本をなす者は宗教的感情である、宇宙の靈力なる神佛を信ぜしめ、人間の感情を崇高にすると云ふことは、感情教育には最も大切なことではないか、其處迄の教育を學規で施すことが出来ないとしても、教育の目的を遂るに大關係ある宗教の觀念までも、學校教育に於て排斥



せんとして居るは何故か、我々は茲に於てか國家の爲に大に宗教性の必要を説いて、大々的に宗教觀念を最高度に發揚しなければならぬのである、宗教家としても教育家としても、宗教性の健全なる開發は如何にして成し遂げ得るかと云ふことが、同様に必要なる國家の爲め人生の爲めの問題となるのである

斯る譯であつて此の智情意の三方面から考へて見るに、智育の上にも現代智識の結論は宗教に近づいて居るものであり、意志の方面には勿論信念を要し、又感情の崇高と云ふことには宗教心ほど大切なものはない、故に此の意義に於て研究を進めねばならぬ

夫れから他の方面から考へて見ると、人間一切の徳の根源は何處にあるか、此の道義心の發源點は如何、仔細に考察するに儒教では誠心と云ひ、數島の道では大和魂と云ひ、日本道徳の發源點は茲に存して居る、之が國民性を造つて居る所の根本である、之を大和魂の上から見るも宗教の信仰と頗る連續して居るのである、儒教にては「信は徳の母、道の元め」と云ひ、一

つの信念が一切の道を行ふて行く基となると教へて居る、其處で學校で智育徳育を仕遂ぐる上にも、穩健の人格を造る上にも、大和魂と云ふ包含的なものを尊ばなければならぬ、之は一切の道徳を發現する根本である、軍人の勅諭には忠節も武勇も五箇條何れも、一の誠心から出たものでなければ用をばなさぬと御示し遊ばされて居る、此の一誠が人格の中心である、而して之が頗る宗教的の意味を有つて居る、宗教と云へば何だか別箇のものゝ意味に取る人が多いが、決して宗教とて全然別のものではない、天の道に基くものである、此の天の道に依つて人生の道が養はるゝと云ふことである、誠心は 先帝陛下の仰せを拜すれば 目に見えぬ神に向ひて耻ぢざるは

人の心のまことなりけり

とあり、上古史を見れば大國主尊が自分の魂を神社に祭られて居る、佛教では人間の徳は凡て自分の方にある所の佛性より發現すると説く、此の佛性あるが故に佛教に對して接觸して來るのである、故に宗教性が

大和魂と關係あることは明かである、然るに絶對の靈力なり、人間の明徳から來る所の此の誠心を尊重せぬは道義の發源點がなくなつて仕舞ふ、人格の中心を確定することが出來なくなつて來る、然るに多くの教育家が「心だに誠の道に契いなば、祈らずとも神や守らん」と云ふ古歌の意を誤解して、自分のみて誠を得らるゝやうに心得て居る、此歌を仔細に吟味せよ、即ち天の道と眞心が契合するならば、祈らずとも神様は護つて下さると云ふので、之は誠の本を客觀的に見て居ることが明白である

此の誠心を得て親に向つて仕へ、又祖先の靈を大切にすることが吾が家族制度の神髓で、孝は此の誠心より生じ、女房小供を愛し、夫婦相和すと云ふのも皆此の誠心から出る、双方の誠が通ふて茲に初めて一家の和合は出來るので、大御心に於ては國民を愛し給ひても、國民の誠心がなければ我國の美風は成立しない、故に國民は大御心に報ゆるの觀念誠心を喚起することが大切である、無限の大御心に基いて國家の生命は成

立つて居る、之に報ゆる國民の誠心が即ち大和魂で、國民の誠心と大御心に結び付いて居る以上は、此の日本國は千代八千代に榮へ行くこと疑ひないのである、斯の如く偉大なる關係を有する宗教性を蔑視するからして、今日の如く腐敗墮落のことが各方面に生ずるに至つたのである、今日女子教育上に諸種の困難を生ずるのも、祖先の靈の存在が家族制の生命なることを忘るゝからで、今の新婦人と云ふやうなものは祖先の靈の存在が家の生命であることを少しも知らないのである

又心理學者の研究する所に依れば、十二三歳位から十六七歳位迄の内に此の崇高なる宗教性が發現して來るので、即ち男女共に十二三位から十六七歳迄に誠の心が起り、佛性の力を覺り、本當の人間が生れるので、此の年齢に至ると立派な人にならうと云ふ觀念が自然に起つて來る、其の時は崇高なる道義心、高潔なる信仰心が勃發して來るのである、其の時には家庭に於ても、學校に於ても、種々有益な質問を試みるやうにな



る、必ず何か宗教的心靈的のことを尋ねるやうになる、平素子供だと思つて居るものが何か大きな問題を掲げて質問する、不思議に思はるゝことがある、學者も即答に因るやうな問題を持つて尋ねることがある、小學校時代に生徒から哲學上の問題などで質問を受けることがあるに相違ない、其の時に先生が答辯に苦しむ、自分が分らないから曖昧な答をする、夫れが兒童の精神の感化を誤り、延いて悪い影響を後年に残す基になる、諸君の家庭に於ても注意すべきことで、子供から哲學者でも答辯に苦しむやうな大問題を持ちかけて來るから、此の場合に於て曖昧に教へず、最も神聖なる解決を與ふれば子供は本當の考が起つて、立派な人間になるのである、何を云ふかと云ふやうな者で、能い加減に誤魔化して仕舞つたなら、夫れが本となつて悪い人間が出来る、此の宗教性は實に包含的な靈妙性である、人間萬般の美德善行の根源である、之は必ず教育に従事して居らるる人は經驗することであらう、此の宗教心を萌芽の時に摘んで仕舞つては、後日容易に

發生せるものでないから餘程注意しなければならぬ、十八九歳の年齢からは男女異性の慾が起つて此の靈妙性を蔽ひ、劣情に支配されて來る、此の情慾の發生する以前に此の崇高なる靈妙性の萌芽を培養して置かねばならぬ、然るを却て學校なり家庭なりで、此の宗教心の萌芽を摘み去る時は、容易に再び其の芽が發生しない、此の時期を經過して仕舞ふと夫れきりて再び同一の芽が出て來ない、此の時を經過して後に父母が氣付いても駄目である、然るに今の父母は既に自分自身が宗教心に乏しいから子供を適當に導くことが出来ぬ、此の肝要の時代を學校にても家庭にても迂闊に經過して、子供が悪い風になつたと云つて後に心配しても追付かぬ、故に十二三歳より十六七歳までの時期に充分注意して、崇高なる道義心高潔なる宗教心を養ふて行かねばならぬのである

此の靈妙性の開發に關しては學校に於ける教育の責任は重大で、宗教心の萌芽を學校に於て摘むと云ふことは、實に學校の責任上免れることが出来ぬのである

る、故に教育家は將來大に注意を要すること、此の事たる一個人の人格の中軸を破壊するに止らず、延いて國家を覆没する源泉になる次第であらうと信ず、又歴史を信仰する觀念も能く養ふて行かねばならぬ、研究することも大切であるが、其處に信念を與へねば何にもならぬ

他面に宗教に對しても注意すべき事は迷信の害を去るべきことで、迷信に陥つたならば文明の進歩を阻害し、教育の効果を没却し、社會を荼毒するに至る、故に宗教の信仰には嚴格の意義に於て健全なる信仰を發揮しなければならぬ、此の宗教性を尊重せよと云ふは宗派とか僧侶のために云ふのではない、宗教心を否定するため不良少年が増加し、犯罪者が多數となり、其の他種々な弊害が續生し、其の結果社會なり其他の事業が潰れると云ふやうな悪影響を悲しみ、國家をして健全なる發達を遂げしめんが爲に宗教心の尊重を唱道するのである、今日の宗教家には社會國家を毒するやうなことを行る者も少からず、國家が何うとか、民心

の將來が何うとか云ふことは少しも心配して居ないものもある、之は無論大覺醒を促すべきであるが、社會の爲に國家の爲に善良なる國民を造る上に、純乎たる宗教性が如何なる關係を有つて居るかと云ふ考察から、人生と國家の前途を思ひ、深き注意を此の一點に拂はれんことを希望するに外ならぬ、此の宗教性涵養如何は國民の忠君愛國の觀念を喚起し、又國民に勇氣を鼓舞する上にも必要であるから、宗教性の涵養には大に力めねばならぬ、教育家に要求する所は少くとも宗教性の萌芽を摘み去るなからんことを希望する

前にも述べた通り宗教の方には迷信に流れることは大に戒むべきで、迷信の害毒は實に多大なものである、迷信に走ると衛生觀念にも衝突するやうなことがあり、學校教育の効果を薄らげ行くことにもなるから、此の迷信は許すべからざるものである、大伴に於て學校の教育を翼賛して教育の効果を補けて行くと云ふ考を持たねばならぬ、教育の本旨は、先帝陛下の勅語に依つて明白であるから、宗教家としても之に伴るやう



なことをしてはならぬ、又宗教家は政治上からの冷遇や、教育家の偏見に憤つてネジケ根性を起してはならぬ、正々堂々の歩調を保つべきである、宗教家は如何なる場合に於ても迷信を助長して、智識の教育道徳の教育に逆行してはならぬ、信仰は宗教家の獨占物の如く思ひ、又教育家は國家を獨占物の如く思ふは大なる謬見誤見である、人を迷信に導くやうなことを爲すものならば斷乎として僧藉を剝奪して仕舞へばよい、夫が爲に管長なるものを設けられてある、ツマラヌ事を爲す者があれば直ちに僧藉を除いて仕舞へばよい、而して國民精神の影響如何に重きを置き、更に進んで宗教界の改善を圖らなければならぬ、今の神道佛教の中には随分迷信を助長するものが居る、國家の前途を思へば先づ政府も教育家も迷信を助長する宗教家に向つて痛撃を喰はして行かねばならぬ、此の方面のことに手緩いのは要するに思想問題を重視しないからである、又宗教信念の中に厭世の精神を助長するやうなものは甚だよろしくない、大に戒めねばならぬ、厭世思想

が起れば神聖なる宗教が破壊されて仕舞ふ、故に政府に於て是等の方面を取締ると云ふは賛成である、國家の害となる宗教家の行動はドシ／＼改善して行くがよい、宗教家は自覺すべきは當然なるも、一方から云へば之が出来ぬは政府の腰が弱いから、厭世思想なるものは全く社會を破壊するものである、近來の社會主義も一部の原動力は厭世思想の變形したものである、社會主義は國家を打破し、財産制度も打ち毀して、權利財産を均等にすると云ふやうな空想で、國家の政治道も廢しやうと云ふのであるが、此の社會の向上發達には非國家的社會主義と、國家的社會政策との別を知るべきで、社會主義は一方極端なる物質主義であるが、又他方からは厭世思想が助成するのである、彼の逆状態は厭世的思想が青年に多數あるやうに思はれるから、厭世宗教は大に改善を促すべきで、場合に依れば踏み潰して捨て、仕舞ふがよい、是等は誠に國家の健全の發達を傷めるものである、又獨善的の宗教は教育と一致しないものである、孟

子なども云つて居る

欲、潔其身、而亂大倫

と、君臣義あり、父子親ありと云ふ忠孝の大義は、人間の大切なる道徳である、之がなければ禽獸に等しと云つて居る、其の身一人を潔うせんと欲して忠孝を忘るゝは大罪なり、教導職の任にあるものにして何等社會を教導しないものがある、斯う云ふ隱遁主義に甘じて國民を導く活動を怠るは、是れ亦許すべからざる所のものである、社會教育には少しも力を竭さぬやうな宗教家は捨て置き難き弊害である、刻下の急務として活動動勉の風を要求せねばならぬ、故に宗教は獨善主義のものであつてはならぬ、國民精神の發揮に努めなければならぬ、遺憾乍ら健全な理想の宗教家は今日の處極めて乏しいのである、却て國家社會の秩序を傷ぐる様な迷狂の思潮が近來段々生ずるやにも思はれる、而して現代に注意すべきは宗教に依る悪弊と、西洋カブレの文學の悪弊とは相助けて國害を醸しつゝあるにあらざるか、之を此の儘にして置くならば、日本の國

家の前途を誤る者は是等の思想中から發現するのはながらうか、前途甚だ憂慮に堪へん次第である、今年の地方官會議に於て文部大臣は斯う云ふ訓示をされて居る、「教育は國家を基とし宗教は人類を基とす」私は思ふ、斯様に明かに分界を立つる事の出來得るものか、何うか、恐らく文部大臣は研究の上で確かに分界し得ると見て訓示された者ではあるまい、少しく言葉が足らぬ、文部大臣は教育と宗教との分界を斯う云ふ風にしたならばよからうと思ふて、此の訓示を發せられたのであらうが、教育は國家を基とし宗教は人類を基とすると云ふのは實に明白で、明白過ぎはせぬか、教育は國家を基とすると云ふは異議なかるべきも、理想的の國家は人道正義を顧みず天地の公道を無視するものでない、否國家の力を以て人道正義を扶翼し、天地の公道を發揚して行くべきである、又宗教も完全なる意義に於ては人類を救はんとする博愛の精神と同時に、國家の發達を翼賛して行くべき者ではあるまいか、現今の世界は國家を離れて別に人類あるにあらず、故に



人類を救はんとその精神も之を實現せんとするに當りては、それ／＼の國家と調和して、その國家的經營と調節されたる範圍に於て救済の目的を果すべきではないか、斯くて理想の國家と完全の宗教とは一面に於て異なる分域あるも、他面には尤も能く和協してその目的を達成し得るのである、故に教育と宗教との事業に於ては分域を異にするも、根本的に極めて密接なる關係を有するのである

學校に成立宗教の容れ難きは歴史を異にし形式を異にせる諸種の分派ありて、其の教義に於ても人類本位のまゝにて、一向國家との調節を考量せざる幼稚のものもあり、又現實を輕視して厭世の思想を吹き込む如き害毒あるものも存するから、一概に學校教育に宗教を採用することは出来ないのであるが、單なる考を以て宗教は人類を本位とし、教育は國家を本位とするから、相容れぬと解して、一切の宗教が人類本位のまゝあり、教育が人道も天道も顧みないて貧弱な國家思想のみを吹き込むものゝ如く解するは、非常な謬見

てはあるまいか、理想的の國家の中には一種の宗教性を要し、又確かに宗教と同一の目的同一の神聖を包容して居るのである、又宗教としても絶対の信仰を維持しつゝ、幽妙なる意義に於て我御國體を扶翼するものが存して居る、之に反して頗る御國體に一致し難き宗教もあらう、教育と云はず政治と云はず學術と云はず宗教と云はず、苟くも世界無比の御國體を毀損するが如きものは、文學の衣に隠るゝも宗教の衣に潜むも斷じて容認すべきでないと思はす

無智の人を妨るは當世の學者の所行也。是還て愚痴邪見の至り也。

(論道文四七〇頁)

特殊教育



盲啞白痴の救護

子爵 五 島 盛 光

外國の統計に依れば人口一萬人に就き、盲人九人、啞者八人の率であるが、今暫らく之に依れば、日本に於て盲人は八萬五千人位ある割合である、外國に於ては最初は盲人や白痴を虐待し、興行物の囃子に使用したこともあり、甚だしきに至りては殺して仕舞つたこともある、盲啞教育や白痴の教育の起つたのは中世以後である、然るに我日本に於ては、盲人救済は古くから行はれて居つて、仁明天皇の王子人康親王が、盲目で在らせられた爲に日向の地を親王に賜ふたと云ふ歴史を始めとし、其後檢校の制度などが設けられ、文學者もあり音楽家も輩出し、殊に有名な杉山檢校が出てから、盲人に鍼術を教へ、之に依りて盲人が生活の途を

立てることが出来る様になり、按摩と鍼治は盲人の獨占事業として保護せらるゝに至つた、此點は外國に優つて居る點であつて、今日外國では日本に倣つて盲人に按摩を爲さしめんと研究して居る、盲人救護の此の歴史は我國の誇りとするに足るものである  
次に啞に對しては、既に適當なる保護を加へて居る、獨逸に於ては啞に仕事を與ふる方法として、陸軍では地圖の色を染めさせ、海軍ではハンモックを作らしめて居る、啞は音聲を使はない仕事であるならば何でも出来るから、仕事の種類に依りては啞でも充分出来る、然るに盲啞學校を卒業せる啞者が、仕事に就くことが出来ない爲に父兄が失望して居る様子でありま



すが、之は社會一般が聾人の保護に就て注意する程度が低いからであると思ふ、だから聾人を教育する學校に於ても亦社會に於ても、聾人に適當の仕事と與ふる工夫を爲すの必要がある、聾は其數に於て決して尠なくないのであるから、社會としても注意を拂はねばならぬ、貧民や浮浪者の問題程には大きくないけれども、社會政策から云つて等閑に附することが出来ぬ、豫防と云ふ點から云ふと、盲人は豫防の途があるけれども、聾には殆んど豫防の途がない、従つて盲人には親の注意不注意と云ふことも關係するが、聾は親が注意して居つてもなるのであるから、徹して聾人は盲人よりも氣の毒である、而して此盲聾者教育に就ては、盲聾を同じ學校に於て教育すると云ふことは、良くないと云ふ議論が多い、其理由とする所は、教育上にも困り、又手數のかかり方も互に違ふから、經濟さへ許さば別々に設くる方がよいと云ふのである、外國では盲聾に義務教育を施して居るが、日本では全國の盲聾を教育し得る設備が出来て居ない、調査に依れば、

育を普及せしむる方針を執らねばならぬ、各地の小學校に盲聾の爲に一學級宛ても設けて、義務教育を施すに至らざれば、盲聾から犯罪人や不良少年を無くすることが出来ぬと唱へて居られる、  
 さらに聾人の教育に就ては、聾人の教育を初めて施したのは、佛蘭西のミカエル、ブレッツペーと云ふ人であつて、氏は貴族の家に生れて同情の念に厚く、而して聾人教育の動機は、千七百十二年に或る友人の家庭を訪問した所が、折りしも二人の姉妹娘が裁縫して居つた、が一人の娘は始終無言で沈黙して居るのを見て機子を開くと聾であることが分り、憫愍の心禁する能はずして聾人の教育を始めたのである、此の教育法は手真似を用ひて教めるのであつて、一名佛蘭西法と稱せられて居る、其後獨逸に於て手真似に依らずして聾人の教育を行つたが、之は發音法又は獨逸法と稱せられ、一時佛蘭西法の手真似法を壓倒する程に盛んに行はれたが、學者の間に議論があつて手真似法に逆戻りをして居る、聾者教育は佛蘭西が嚆矢であつて、何れ

小學教育を受くべき盲者の兒童四千人に對して就學して居るものが百八十五人、聾者の兒童六千五百人に對して就學數五百八十人、何れも教育を受けない者が多數である、而して監獄へ行つて見ても、盲聾にして入監して居る者が中々に多い、盲聾に教育を施さずして放つて置けば、犯罪を爲し不良の行爲をするに至るのであるから、此點から考へても適當の施設を爲さずには置かれぬ、盲聾は五官の整ふた人の様に周圍から同情せられないから、所謂僻み根性を起して犯罪等に陥り易いのである、外國では盲人の爲にも電燈を點じて居るさうであるが、日本では盲目に提燈と云つて盲人に電燈を點すと云ふと奇異に思ふ様であるが、仔細に研究して見ると大に其必要がある、京都の訓盲院の前身なる盲聾學校にては、聾の教育を先にしたが、聾の教育が盲人教育に先じたことは外國と其授を一にして居る、小西氏の盲聾教育に對する意見に依れば盲聾教育の區別を立て、之が教育に従事する教師を別に養成し、又教員の待遇法を定め、以て全國に盲聾教

の國に於ても之を參考とし又多少の改良をして教育を實施して居るのである、  
 最後に白痴の教育であるが、この白痴と低能兒との區別は頗る困難で、又其種類も色々ある、從て其教育も中々に困難であるが、力を盡して教育すれば身廻りの事位は出来る様になる、併し白痴教育には設備を要するから、之を凡ての白痴に普及せしむると云ふ事は難事である、外國では初め白痴を化物であると云つて殺した時代がある、初めて外國に於て白痴教育を施したのは、佛蘭西の國立盲聾學校醫長イタート氏で、千八百年代である、當時アブアイロンの聾童と稱せられて山に投げ棄てられ、野獸同様の生活をして居つた白痴の少年を救ひ、之を教育して見んと志して初めて佛蘭西で實行したのである、千八百三十九年フアーレ氏が、其後を襲ふて白痴教育に従事したが、千八百四十八年佛蘭西革命の爲に中止となり、其後年を経てセガン氏が此の教育法を北米に再興し、ボストンに立派な白痴學校が出来るやうになつた、ボストン白痴學



校は現今世界に於ける白痴學校の模範となつて居る、白痴教育の結果を一言にして云へば、之を適當に教育すれば、普通の人間とまでには行かなくとも、自分の身廻りの事だけは便じ得るやうになることは確かである

と信ずる、以上盲啞及白痴の教育は、之を適當に施して啓發するものあるならば、そこに教育上の成績を擧ぐることも出来るし、又彼等自身をして人生上の趣味を覺えしむることも得るであらう、社會政策の上より見て、貧民問題や勞働者問題の如く、直ちに國家の消長に繋はるほどの大問題ではないけれども、人道上より考へ來れば、是皆國民の一員として生存する以上は、國家としても適當なる施設を爲し、社會の各人が同情の念を以て之が救護の方法を講ずるは至當の事であると信ずる、國民はこの哀れむべき盲啞及白痴者に對して一片惻隱の情を瀉いて、彼等を救護せらるゝことを熱望して止まざる次第である。(文責在記者自學生)

ベルシヤ 通信

統一國特別會員機關長岩澤理八氏は、記者に書を寄せて航海中の所感を告げて云はく

ベルシヤ海の如き交通不便の地に航海復して居つては、日本内地の状況は知る由もないのみか、一ヶ月以上も航海を續けて居つては、「亞弗利加」や「アラビヤ」や又はエヂプト等の乾き切つた山を見るのみで、そこに幽玄なる風光の美を擲することも出来ない、従つて時代に後るゝやの觀なきにあらずだ、けれども航海上に關する特殊経験を積むことの出来るのは勿論、陸上生活の中に於て名利に抑留せられて居るよりは思想の修養は充分に爲し得られる、此點に於て大に幸福であると感謝して居る次第であるが、此地の宗教状態の一端を窺はんか、印度の一部より「ベルシヤ」、「アラビヤ」、「エヂプト」、「トルコ」等の國は、尤も「モハメット」教が盛んである、當年「モハメット」ガ、メツ

カ市に現はれて天神より真教を授けられたりと唱へ、汎神教を排して一神教を説き出したので、市民は之を異端邪説として極力反對した爲に「メヂナ」市に逃げたのであるが「モハメット」は普通の説法方式では多數人類を感化するの容易ならざるを覺り、劍を掲げ腕力を用ふることに決意し、則ち信者中の壯丁を集めて軍隊を組織し、大擧一擧異教徒の征伐を行つた處が、到る處大成を奏して四方を侵略し「アラビヤ」半島全部を平げて外征に就かん底の勢であつた、此の宗教は感化誘導を迂遠なりと識つて腕力の布教を試みたものため、最近の倫理思想より考察せば妥當を缺くものあるべしと雖、今や孟買其他の印度地方には多數の信徒もあり、ベルシヤ一帶は同教徒の籍に在らざるものはない、而して同教徒は、毎日一度は「メツカ」市にあるアルラ神社の方向に禮拜するを日課として居る故に形式より觀れば宗教信仰の旺盛であるやうであるが、文物の勢力は既に衰へて人心指導の活力がない、

一國における思想の中心がない、兵と劍とを以て強制せられたる宗教信仰は、人心の根底に動力とならないから、徒らに習慣形式は殘存しても生命は亡くなつて終ふ、從て國民元氣の中軸を失ふことになるので、發展の方策として見るべきものはない、商工業の萎靡不振は國力を減退せしめて、獨立運動の手足を縛ると同じである、今の「ベルシヤ」とか「アラビヤ」とか「エヂプト」と云ふ國は、獨立存在の團體とは見うけられない、殆ど英國の財源地となつて居る、我々の見地から考へても何ぞ斯様に努力の精神を缺いて居るだらうかと、時に一掬の同情を瀉がずには居られぬ譯だが、之も國民精神の内包を探りて見ると、消極主義の迷信を加味せる宗教の害毒ではなからうかと思はれる、宗教は偉大なる力を有するもの、而して之を撰擇し來りて人生に活力を與ふる底の宗教でなければならぬ、此意義に於て我日本には日蓮主義の大發展を熱望して己ざる次第である、自分は航海中常に日蓮上人の警句教訓を拜讀して、身心頗る頑健である、幸に之を諒せよ



美術



# 信念と努力

大成丸船長 小 關 三 平

私は日蓮主義の研鑽に就ては、日向ほ淺くして講演の材料と云ふべきものはありませぬ、唯だ私が昨年以來、商船學校の練習船に乘組みまして久しく航海致して居りましたので、航海中に於ける宗教的意味ある所感を述べて見ようと思ふ

大成丸は昨年の七月品川を出帆致したのであります、百二十名の學生と士官及傭員等を合せて百八十一名でありました、こゝに航海寄港地及航路順を申し上げますと、昨年七月十八日館山を抜錨し、北太平洋を横斷して北米南加州に着、十月同港を發して太平洋東部を南航し、南米の南端「ケープ、ホルン」を繞航して南大西洋に入り、北東に航して南阿の「ケープ、タウソン」に寄港し、夫より「セントヘレナ」島「ゼームス

タウン」港に向ひ、更に南東貿易風帯を西航して南米「ブラジル」國「リオデ、ジャネイロ」港に向ひ、再び南大西洋を東航して喜望峯岬を繞り、南印度洋を東航して西濠州の「フリーマントル」に寄り、南洋「スンバワ」島の「ビマ」港及び「アンボン」島の「アンボイナ」に寄港して十月十八日品川灣に着いたのであるが、航海日数は十五ヶ月半にして航程三萬六千三百哩である、さうして航海中喜望岬航行の時は激しき暴風に逢ひまゝして、九十日間も非常の困難を爲ました、亦大成丸に取りて一大不幸事でありましたのは、多望なる三等運轉士が一名殞れまじし、學生が脚氣症に罹りて空しく將來の希望を捨て、逝きましたのと、下級船員一名が之も病に犯されて亡くなりました、斯様な有様であ

りましたので、吾々の今回の航海は、實に身心の上に非常なる苦痛を感じたのであります、殊に學校及通信省の當路者には一方ならぬ心配を煩はした次第であります、而しながら私共自身の修養の上には、尤も良き亦容易に得られない好機會を得たことを喜ぶのである、私自身としては非常なる心配はあつたが、修養の機會を得たのは何よりの幸福であると感ぜざるを得な

私の考へてはあります、日蓮主義の鐵仰と云ふのは研究的態度でありまして、斯かる方針では其心髓を握ることが出来ぬと思はる、宗教は眼の色を變へて自分の身を投げ出して懸らなければ大なる力を得ることとは出来ないと思はる、如何に智解は進んでも信仰を得なければ、身心の動搖を止むる活力がない、私は航海中身心の上に心配をしたが、智識理解だけではこの心配と調和を取つて行くことが出来なかつた、御遺文を拜讀して上人當時の心持を拜察し、其感想は深刻に精神に泌み渡つたのであります、上人が龍の口に於

て頭の座に御坐りになりました場合、四條金吾等の信徒の者は痛く之を嘆かれました時、上人は「不覺の殿原かな」と諭し、更らに門下を警しめて

兼て存知の旨也、此程の喜びを笑へよかしと仰せられて、いま日蓮が法華經の爲に一命を捨つるは、此上もなき喜びである、この法華經の爲に一命を捨ぐる事は「糞を以て金に換へ」と同じことであると悦んで居られる、其他災厄に逢ふごとに常に欣喜法悦を以て迎へられて居る、非常なる境遇に處して、少しも苦痛を感じて居られぬ、法の爲に従容として喜び勇んで笑つて居る、彼の佐渡孤島の雪中に非人を捨つる荒野原に在りて、凜烈たる風雪寒苦を物ともせず、凍れる筆を執りては教義上の述作を爲し、有縁の信徒には執烈なる信仰を興へ、本尊を安置して題目を唱へつゝ、「日本第一の富めるもの也」との満足と悦びに充ちて居られた事を拜する、斯かる上人の生活境涯は、法華經研究に由りて得たる力でない、信仰に依りて佛陀の大精神に契合したからである、而してまた當年の



信徒は、堅固なる信仰に安住して無限なる力を得て居られたと云ふ事を思ふ、何となくそこに崇高の威がある、日蓮主義の研究は悪いことではないけれども、智解のみでは吾人の思想の根底として力が足りない、熱烈なる信仰を以て智解を進めることがよいと思ふ、研究的態度では信仰に進むことが出来ぬ、私は常に青年學生に接して居るのであるが、學生が三四ヶ月の航海を致しなると、精神上に倦意を起すものがあります、それ等學生の精神上的の打撃は、監督者の苦痛であるばかりではなく、海運發展上に大なる影響の存するものである、私は之等に關し深く心を練り思を凝らし、堅實なる精神を養ふて其目的に進むべき方法を講ぜねばならぬと考へて居る次第であります、近代に於ける科學の進歩は盛に智解を注入するに努めて居るので、物事の理窟は能く知つて居るが、精神の根底に強き確信も勇氣もない、それではいかぬと云ふ、大きな建物を造るには其地盤を固めるのが大事であるは言ふまでもない、近世の思想を受け入れるのにも、唯だ知ると云

ふことでは實行の力がない、宗教的信仰の基礎の上に立たざれば、錯綜せる智解を統一して自分の事業に集注することが出来ぬ、努力の精神は宗教信念の源泉より湧き出づるものであると信するのであります、私共の航海は永い月日でありましたので、少し元氣の弱りかけたものもありましたが、信念があれば此機會を利用して修養することが出来る、人は如何なる事業に従事して居つても、確固たる信念を養ひ、而して智解を磨く事にせなければならぬ、私は航海中に深くこの事を感じました、今後は斯かる方針を以て自分の修養に勵み、又學生に對してもこの意義を鼓吹しようと思ふて居るのであります。



史 蹟 靈



海外宣教之日持上人靈蹟探檢

花 木 即 忠

▲日蓮上人の高弟日持上人が法華經主義を海外に宣傳せんと欲し、六百年前、樺太島より今の露領沿海州に渡りしことは、歴史口碑の共に傳ふる所にして、日持上人が果して樺太より對岸の大陸に渡りしとせば、其行路を靉靄海峡の最も狭き黒龍江口右岸の地を選びしなるべく、夫より黒龍口を過つて今のハバロフスクよりアラゴエシチエンスク方面に向ひ、更に轉じて蒙古に入りしが、或は黒龍島盛里兩江の合流點をハバロフスクより、烏蘇里江を過つて今の滿洲新德方面より朝鮮に入りしか、或は黒龍島松花兩江の合流點より松花江を過りて吉林方面に入りしかの三經路に外ならず、日持上人の樺太に於ける遺跡は既に歴然たるものもあるも、對岸遼東方面に於ける遺跡に至つては未だ之を確めしものなく、史家宗教家の共に遺蹟とする所なりしが、日蓮宗樺太布教管理たる花本即忠師は、日露戦後間もなく同島に渡り三十七日間に二百五十里を跋涉して、同島に於ける上人の遺跡を探檢せしことあり、爾來對岸露領探檢の志を懷き居りし折柄、四十二年の夏樺太日々新聞に日持上人の遺跡と題し、一漁夫がニコラエウスク附近の漁場に赴きし際、不圖一石碑の表面に「南無妙法蓮華經」と刻し、裏面に「日持」と刻したるものありしを記したりとの談を掲げありしより、日夜探究の念を絶たざりしも、探檢には多少の資金を要し、且つ露語通譯の必要もありて容易に實行の機會に到達せざりしが、本年四月十一日決然法衣の袂を振つて樺太島を出發し、東京に出でて海外旅行の手續きをなしたる上、身延山に詣りて成功を聖願の靈に祈り、教員より便船に乗じて探檢の途に上る、東京の有志は此行を壯として後援を興へ、二十年間露領に在りて露人の民情風俗に精通せる松尾氏の無報酬にて同行するを許せられ、こゝに前途の成功を心に期しつゝ、道標に上陸せしは本年六月七日なりしが、爾來露國官憲の壓迫に遇ひ時には馬賊の難に遇ひつゝ、大探檢を試みたる花本師は、十月二十五日大連日宗布教所に歸來せりと云ふ大連に於ける滿洲日々新聞紙上に同師の談話として掲げられたるもの、記者は花本師が東京出發の際、統一閣樓上に於て此壯圖を贊して會談したる事あり、感慨深きを覺ゆ、依てこゝに之を掲ぐ (白碧生)

六月七日浦鹽に上陸するや、樺太廳よりの紹介状を携へて直ちに總領事館に野村領事を訪問し、素志目的を語りたるに、露領に入りて探檢などとは思ひも寄らず到底其目的を達すること能はざるべしと、領事より



中止を勧められ、露領探検の困難なる一例としては、曾て農商務省の一技師がマツチ軸木を調査する爲め、露國大使館の手を経て露國政府よりの許可を受け、西比利に入りて愈々調査に従事せんとせしも、地方官憲は中々承知せず、假令中央政府にて許可すとも地方の事は地方官憲の権限内に在り、恣まゝに山野に蹈込まば見附け次第捕縛すべしとして跳ね附けられ、到底其目的を達せずとて引返せし實例あり、露國官憲の眼には日本人とさへ云へば、僧侶も洗濯屋も寫真屋も等しく軍事探偵の如く映し、其恐怖の觀察は寧ろ兇戯に等しきも、實際斯の如くなれば前途は只だ危険あるのみ、到底成功の望みは無しと聞いて上陸一步先づ失望落膽の境に遭遇せり、予は總領事館に於て野村領事より中止を勸告せられしも、假令前途に如何なる危険横はれりとも、一旦志を立て、故國を去りし以上は、靈跡の片端なりとも探り得ずして此儘引返さんこと、六百年前の昔人智未だ開けず言語相通せざる時代に於て、闊浮提廣宜流布の使命を負ひ、佛縁薄き蠻夷の國に妙

法を弘通せんと、孤錫飄然蝦夷松前より鞆に渡り給ひし日持上人の遺靈に對しても愧かしと、意を決して探検の途に進みたき由を領事に告げ、然らばとて時に應じ機に臨みて執るべき方法を教へられ、彼の地に到らば露人なり支那人なり相當の者を使ひて捜査探検の目的を達すべしと、通譯松尾氏と相携さへ會て大和民族の古碑有りと聞くニコリスク指して出發したり、ニコリスク附近は露國の要塞地帯にして容易に足を踏入るべくもあらずと聞きしかば、同地に着するや、直ちに相當の智識ある支那人を備ひて附近を探らしめしにニコリスクとアラスドンナイとの中程なる土人部落に一基の古碑あり、土人は古來鎮守神の如くに之を祀り居りて、數百年の星霜を経たるものと見え、碑面殆んど毀損して文字明瞭に讀むべからざるも、碑の上部に梵字の如きものあり、碑面の文字の中に「偏」を有する如き文字ありて、同地の日本人間には一般に「源義經の遺跡なりと稱せらるゝものなる由、義經の遺跡にして果して此地に存在すとせば、歴史家としては研究

の價值無きに非るべしと雖ども、兄頼朝と相合はず奥州に逃れて跡を蝦夷に潜めたる義經の如きは、宗教史的研究に何等の價值なしとして之を看過したり、或人の談にニコリスクより西方一里の地に露人の一製粉會社あり烏蘇里鐵道開通の當時迄、會社の正面に一大古碑ありて高さ四五尺の龜形の上に、御影石の幅二尺五寸高さ一丈と覺しき碑面に二十字ばかりを刻しあり、其中に「公」の字ありて是亦「源義經の碑ならんとの説あり、右の製粉會社建築の際正面に在りて邪魔なりとて他に移さんとせしも容易に動かさず、人夫の傷つさし者多數なりし爲め終には手を觸る者必ず神罰を蒙るとて、人夫の應ずる者無く其儘に放棄しありしが、烏蘇里線開通と同時にハバロフスクに移し、今は同館の横手に据を置かると、支那人の一學者曹廷杰と云へる人の説に、今より二十年前、右の碑石を見し際には「寛永」の二文字と「湖北進馬三千匹」の七字を讀みしが其後數年を経て再び古碑を訪ひし時は碑石半ば折れて文字最早讀むべからず、墓石に「其台」の二字尙存す

るを見たり、何人の碑なるやと知らずと、「湖北進馬三千匹」の七字果して存せば右の碑石は日持上人には何等の因縁無し、日持上人の靈跡と信ずべき點無ければ敢て探究するの要も無ければ、ハバロフスク博物館には鬼子母神の像を陳列しありとは浦鹽にて聞きたり、上人の靈跡探究に何等かの緒を與ふるやも知れずと、右の碑石實檢かたゞ數日にして、ニコリスクを見棄て汽車にてハバロフスクに到る、博物館に入り鬼子母神なるものを見れば、何ぞ計らん極めて近代の製作に屬し、六百年前の遺跡探究には針の穴より洩るゝ燈火程の光明をも與へざるには少からず失望したり、序てに彼の半折の碑石を見しに今は全部ペンキ塗となして文字は影だに止めず、露人は石を見ること尙木の如く文字を見ること尙蝕の如きか、折角の古碑も何等考古の資料とはならざりき、尙ハバロフスクの附近を捜査せしに何等得る所なかりしかば、七月十一日ハバロフスクを發し、船にて黒龍江を下りニコライウスクに向へり



ハバロフスクよりニコラエウスクに引返したるは、樺太日日新聞に掲げられし「日持上人の遺跡」に就ての一漁夫の談なるものを確かめんが爲なりし、ニコラエウスク民會長島田氏は同地方に於ける成功者にして又名望家なれば、到着するや直ちに島田氏を訪ひて彼の新聞記事を示して先づ實否を糺したるに、氏は永く此地に住し居るも未だ曾て附近にさる靈跡在るを聞かず、殊に新聞には港外一里計りとあれど、今てこそ此附近は要塞地帯に屬し、外國人は素より露國人すら勝手に通行することを禁ぜられ警戒頗る嚴重となりたるも、以前は露國官意の監視は無く我も彼も木材の伐採薪炭の切出しに山野を跋渉して誰咎むる者も無かりしなり、果して古碑などの存在したらんには自然予等の目にも觸れしなるべく、予の目には入らずとも何人かの話にも聞きたらんに未だ曾て其事を耳にせざるはさる物の存在を否定するに十分なり、逆も此附近一里や二里の處には靈跡を發見せんと思ひも寄らず、新聞記事は何かの間違ひならんとの事に、恰かも狐に魅せ

られたるが如き感懐き、靈跡探検を決意せし最大の動機たる一漁夫の談にして果して信憑するに足らずとせば、最早探究の目的物は失はれたるなりと、再度の失望落膽に沈めり、されど信念の爲領事館に赴きて尋ねたれど知る人無く、島田氏の漁業部に屬する十餘人の幹部の人々に聞き糺したれど是亦否定せらるゝのみにて靈跡探検の光明は茲に全く絶えたり、目的地たる黒龍江口に達して目的物は失はれたり、最早研究の方向を轉じ此旅行を徒勞に歸せしめじと、曾て樺太島に於て土人の風俗宗教等研究の間に、日持上人弘教の遺風存せるを見しことあれば、此附近に住める古代民族の宗教状態を調査せんと決し、島田氏に諮りたるに、島田氏は古代民族は多く黒龍江口内外の沿岸に住み居れば、新聞記事にある港外とは或ひは江外の意味なるやも知れずとて、圖を描きて江内江外の區分を示されれば、僅かに一道の光明を得たるの思ひをなし、さらばとて氏を煩らはして下江の便船を得、黒龍江外間宮海峡を隔て、樺太に面せる沿岸一帯の土人部

(27)

落探検の途に上れり、船は圖らずも外ポロンギヤ第二十九號の漁場に着せしに、此地に函館三洋組總詰部が本年の殘品整理の爲め小屋掛を爲し居るに會せしかば島田氏よりの紹介状を携さへて同所を訪ひ、主任中里壽郎氏に面會して是迄の經過を語りしに、中里氏は膝を打ち「日持」の二字を刻せる石碑は此地を距る僅かに一里許りの處に在りとの事に、夢かとはかりに打喜び膝すり寄せて其場所は何處なりやと問へば、中里氏語り出して曰く、今を去る五年前確かに明治四十一年の事なりし、此地より一里許りなる三十號漁場に一の小さな岬あり、漁場は岬の右側にありて前面遠淺なれば棧橋を架するに便ならざるを以て、止むを得ず岬を堀割りて左方に棧橋を架設したるが、堀墾工事中岬頭草を掃へば一基の古碑あり、幾百年かの風雨霜雪に隠されて碑面は殆んど毀損し文字の讀むべきなけれど、裏面には僅かに「日」の字と「持」の字との二つを讀み得たれば「日」の字によりて多分日本人の墓なるべしと推定せられ、土人に問ふも古來日本人の墓と言傳へらるる

由なれば、扱ては我等より先に此地に渡りて異境に骨を曝せし健氣の同胞の墓か、何處の誰かは知らねど祀つてやるべしとて、附近を掃除させ草花を折り來りて碑前に供へしことありき、其後訪ひし人も無ければ今は如何なりしやを知らざれど、五年前に現存せしことは確かなり、此碑石こそ尊き日持上人の御墓なりしかと、中里氏も始めて知り、只管靈跡の其儘に存在せんことを祈れる様なりし、さる尊き聖僧の御墓なりしかと言ひつ、中里氏は座を立つと見るや、直ちに戸外に出でたりしと思ふ間も無く歸り來り、其當時石碑の附近に住居せし露人チーミルゾフを尋ねて日本人の墓は今も尙存在せりやと問ひしに、彼は暫らく行て見しこと無けれど多分其儘に存在すべしとの事なり、明朝早々現場を見分せらるべしとの事に、予の喜悅は譬ふるに物無く、恰かも水底の珠を掌中に得たるが如き思ひして、其夜は寢に就さしが眠らんとしても眠られず、思ひは此より彼へと馳せ、明日愈々現場を見分したる上は如何に保存の方法を講ずべきか、差當り領事館に



依頼して保護を請ふべきか、若し何人かの口より露國官憲の耳に入り如何なる干渉妨害を受くるやも知れず其場合は如何に處置すべきか、寫眞を撮す途は無きかなど思ひ勞れてうつらうつらと睡む内に、東天明放れて穂相海峡の浪平かに樺太の山影は髣髴として青蝶の如く波上に横はれり、朝餐もそこ／＼に漁場の壯漢四五人を頼み一行七人手に／＼銀筒等を持さへ濱邊に沿ふて行くこと一里、胸を躍らせつゝ岬頭に至れば、嗚呼何たる無情、嗚呼何たる無法、何たる悲惨、何たる滑稽ぞ、一行は啞然として互ひに顔を見合すのみ、岬頭の岩石は削り坦され中央に方七八尺、深さ又七八尺の穴さへ鑿たれたり、岩石附近に累々たるも碑石と見るべきものあらず、中里氏は今より三年前露人チーミルゾフなるもの此地に漁場を開きしことあり、其際事務所にて建設せん爲め斯くは靈地を荒せしと見えたり、さるにても當年の碑石は如何にせしか、或ひは之を礎石に用ひしか、石垣となせしにあらざるかと、壯漢を促して其邊の石垣を壊し、或ひは散亂せる石塊を

轉じて、形狀を檢せしも碑石らしき物を發見せず、予は茲に三度目の失望落膽を味はひ、萬事休すとの嘆聲を放つを中里氏傍らより慰さめ、此地は現に露人ライチンの所有なれば此上恣まゝに發掘せんこと、他人の所有權を侵すの虞れあり、一先引返すべしと決し、漸く中里氏の漁場を歸り着けり、中里氏は直ちにチーミルゾフを招きて發掘の事を相談せしに、兎も角所有主ライチンの承諾を得たる上ならては手を下さん術なし、彼來らば假令岬頭に存在せずとも自然に碑石の行方は判明せんと聞て、僅かに一樓の望みを囑り指切り數へて其日を俟てどもライチン終に來らず、予は心の焦立つ儘、便船ありしを幸ひ一先づニコラエウスクに歸りて前後の策を講ぜんものと、深く中里氏の厚意を謝し外ボルギーの漁場を辭せり、ニコラエウスクに引返し直ちに島田民團長を訪ひて一伍一什を物語り、所有主ライチンへの交渉を請ひしかば、島田氏は早速手續きをなして所有主の承諾を得、種々發掘上の注意を

も與へたれば、便船を俟ちて再び外ボルギーに向ひ中里氏の廿九號漁場に着せしに、時恰かも漁業の繁忙期にて助力を受くべき空手の人なければ、他より五人の人夫を僱ひ來りて岬頭の發掘に着手したり、石と云ふ石は掘起し地盤の少しにても凸起せし所は悉く穿ち見たれど終に碑石らしきものを發見せず、人夫も必死となりて限なく搜索の手を盡くし、果は何處へか移して祀り居るやも知れずと言ひ出す者あり、去つて附近の山邊を搜し廻りしも是亦徒勞に歸せり、碑石と云へば形狀も整ひ居りしなるべく、露人の事とて靈石とも知らず或ひは持去つてベチカの基礎などに用ひしやも知れずと言ふ者あり、土人部落に入りて尋ね廻りしも得ず、最早此上は搜索の術なしとて、斷念し新たなる搜查探檢の方面を研究すべく其場を引上げたり、中里氏は其處より七里程外海に出たる處にワツキと稱する土人部落あり、其酋長の家に日本の陣羽織一領を先祖傳來の寶物として珍藏し、尙二三年前其附近に於て日本の古刀を發掘せしと語り何等かの参考にもなるべし

とて一體同地に赴かれよと勸めたれば、陣羽織と古刀とは日持上人の遺跡探檢に直接何等の關係無しと雖ども、等しく日本民族の遺跡なれば土人の宗教狀態を研究して或ひは得る所もあらんかとて、酋長の家を訪問して見やうと思ふ内又もや一の障礙は起れり、二十九號漁場に建てたる三洋組總詰部の小屋は、官有地に繋れりとして露國官憲に密告せしものあり、小屋は素より機械其外一切の動産を差押えらるべしと漏れ聞えたれば、中里氏は急に部下を集めて如何にすべきかと衆議に語りたるに、此場を去るより外別に取るべき良法なしとの意見一致し、倉庫總詰部を閉ぢ機械器具を收めて其夜朝鮮帆船に部員一同乗込み、予も共に落人の仲間入をなし、風に任せて帆を揚げたるも風次第に風ぎて進行意の如くならず、時々停船の有様にて夜の明くる頃舟は黒龍江の下流、彼の江内江外と稱する沿海線の海面にあり、露國官憲の巡邏船忽ち此舟を見付け朝鮮舟に漕寄せ來り、主任中里氏をニコラエウスクへ拘引する由言渡したれば、止むなく予も同行するこ



と、し、露國官吏に従ひて一漁場の上陸せしに、海上俄かに風出て朝鮮舟の帆を孕ませ舟は次第々々に沖へくくと動き出したれば、ソレ逃すなど露國の官吏は慌たしく漁場より小汽船を走らせて後追掛けて薩語部員の乗込める朝鮮舟を押えたり、予は斯くて中里氏と共に露國官吏の言ふがまゝ帆船にて二日間江を上り、ニコラエウスタに着きしは八月一日なりき

外ボロンギの失敗史を懐中してニコラエウスタに引揚し後、同地の帝國領事館に出頭し、領事代理緒方整爾氏に面會して搜索の顛末を語りしに、同館在勤の書記生にして曾て漁場に通譯をなし居りし時、確かに岬頭の石碑を見しと云ふ人あり、當時何等歴史的關係を知らず「日持」の二字がさる世界的弘教を企だてし傑僧なりとは夢にも知らざりし爲、曩に花木師の當館を訪れし時も此事を言出すに至らざりき、然れど「日持」の二字を刻せし碑の存在せしは事實なりと證言せしかば領事代理も斯る靈跡を證明すべし碑石の紛失を非常に遺憾とし、兎も角探究の功空しからざりしを證

明すべく、實見者の一人なる中里壽郎氏をも招き、改めて同氏より實見當時の模様を聴取りたる上、日持上人建立の碑石が里龍江外、外ボロンギ第二十九號漁場の岬頭に存在せしことは事實相違無しとの證明書を與へ、中里氏も亦生きたる證據として即座に一通の證明書を渡し、民會長島田元太郎氏も亦一通を作つて、花木探究の顛末に裏書をなしたり

予が數句の奔走努力は斯の如くにして僅か三葉の證明書を獲たるのみ、數年來夢想にも描きし日持上人の碑石なるものは終に我肉眼の前に現出せしむるを得ざるを悲しみ、領事館員並びに島田、中里兩氏の厚意を謝してニコラエウスタを去らざるを得ざるに至れり、然れども彼の「日蓮大士眞實傳」に「永仁三年正月元日齡加はつて四十六歳、元朝の喜びに盃を擧げ法を弟子に譲り寺を檀越に任せ、唯一人法衣を握つて旅立ち給ひ、奥州津輕より弘前にかゝり、路の傍の大石に題目を書いて是を日本の名残とし、松前より徒歩に渡りて行儀知れず成給ひける」とある日持上人の傳記

に、樺太より黒龍江右岸の地點に上陸せし事實を附け加ふるを得、夫れより進んで更に孰れかの方面に上人の足跡を追窮し得べきの路を啓ける者と謂ふべし、靈跡追窮の方向は黒龍大江の本流か、松花江か、抑も亦烏蘇里江か、江水茫茫々々として幾千里、其三流の細くして盡る處に、日蓮の宗旨と類似の宗教を發見せることは、宗教研究家の既に説く所なれば、日持上人の足跡は或ひは三大江の沿岸に普及したるものなるやも知れず、ニコラエウスタ在住の同胞は予の探究の顛末を聞傳へて、孰れも靈跡紛失を遺憾とせざる者なく、

中にも安本某氏の如きは、來春餘暇あるを待ち尙一度仔細に岬頭の發掘を試み、得る所無くんば他の方法を以て碑石の行衛を見届くべく、之が爲めには多少の費用敢て辭せずと迄明言したれば、予は其他二三の有志に將來の探究を托して、八月五日ニコラエウスタを辭し、黒龍江郵船に塔じて上流に遡ること約二千露里八月十六日ブラゴエシチエウスタに着し、其地方土人の宗教的狀態を調査研究し、同月廿七日對岸支那島の

里河道に渡り九月廿一日漠河口に着し廿七日黒龍江の終點チラレンヌクに到り、滿洲里を経て哈拉爾に入り、引返して南下哈爾濱に出て、轉じて吉林に入り松花江上流の地を研究して多少得る所ありしも、日持上人の遺跡に就ては何等捉へ得る所無かりしは頗る遺憾なり、然れど若し有力なる後援ありて探究上の費用に不足を感ずるが如き事なくば、必らず成功を見るに至るべきか

佐藤海軍少將云く

日持上人の海外布教の如きは、つまり海外發展の意味合に相違ありませんので、日持上人の海外布教を試みられたのも、決して他の佛教徒マホメット教徒基督教徒などが、世界の各方面に布教を試みる同一の意味合ではなく、更に眞率なる理由によるのでありましようと思ひます、則ち日本國は日蓮上人の御言葉の如く、一國純國の境で國浮提第一の本尊を立つべき資格のある御國であつて、佛敎宣布の本源たるべき資格を具備する資格を備へて居る國であつて、佛敎宣布の本源たるべき資格を具備する資格を具備して居るから、我日本國を中心として布教を開始するのは、法華經の行者の天職であると自覺された結果に外ならぬと存じます



# 經典閑話

笹川 日堂

釋尊一代の説化は人類中心である、十界を擧げて「皆共成佛道」の妙談あるも、畢竟する所は實社會をして佛國莊嚴化するに外ならず、人界を説化の中心として向下すれば修羅畜生餓鬼地獄の四惡趣に淪落し、向上すれば天界聲聞菩薩佛界に到達することになる、されど斯の如きの説明は行布を存する迂遠の修行にして、通途の常談である、法華經は否らず吾人開佛知見の信仰を確立すれば、直に菩薩の地位を獲得して佛界に到達するのである、本師釋迦牟尼佛大悲大悲の本願力我をして常に本因妙(菩薩)の位に安住せしめ給へとの、志願はこの意味に外ならないのである、されど法華經信仰の活力は吾人と本佛との感應を發揮することになる、蓋し吾人の眞價を發揮したるは單り法華經ある而

己、四十餘年の間、聲聞緣覺の地位に甘んじたる、舍利弗目連等の二乘は法華經に來りて「汝等が所行は是れ菩薩の道なり漸々に修學して當に成佛すべし」との釋尊の法音は、則ち彼等をして人類の眞價を自覺せしめたのである、この人類の眞價を自覺したるは、總て吾人をして此の實社會に於て、道のために活き道のために奮闘活動する生存の意義を語かにしたのである、故に菩薩とは人類の眞價を完全に發揮したる者の代名詞とも見得べきことになる、法華經に本化の菩薩を指して「人中三寶」と説くは此の意味である

世には厭離穢土勤求淨土の妄想に驅れ愚鈍劣惡の凡夫を以て甘んじ、この實社會と没交渉に出て、人類の眞價を忘失するものあるは、蓋し菩薩の意義を知らざるの至す所である、夫れ二乗作佛と久遠實成は法華經の特長にして、他の經典になき深遠適切なる教理である、二乗作佛は靈性の發揮にして、完全なる佛性論となり、久遠實成は生命の不朽にして、超勝なる佛陀論となる、二乗作佛は人生觀にして久遠實成は超人觀て

ある、佛性論に於て吾人の眞價を發揮し、佛陀論に於て人格實在の妙義を體得するのである、されば靈性の發揮は吾人の自覺にして、生命の不朽は本佛久遠の自覺である、絶對の靈光を認めて吾人向上の目的を達するにあらざれば、人生に於ける信仰の意義を沮害して吾人存在の柱脚を昏倒することになるのである

眞實に文明開化は正道によりて誘致せらるゝを識らば、吾人々生に於ける意義を確認して、貢獻する所なかるべからず、稻荷不動金神等現金主義信仰に生命を托するが如きは、吾人の靈性と眞價を放棄する狂的態度と謂はざるべからず、庶幾くは、菩薩自任の道念に住して實社會に貢獻する本化の自覺を喚起せられよ

## 日本宗教大會の所見

▲世人が思想問題に注意を拂ふ様になつたのは、最近の出來事ではあるが、常識主義の一點だけは、到底國民思想の啓發が出來ないと云ふことに氣付いて來たので、風教問題に關係ある識者が一堂に相會して親交を温むると云ふことは、時代の潮流をつくるに必要なことである、十一月五日、築地精養軒樓上に日本宗教大會は催された、佛教徒の一部に愚圖を云つたのもあつたがそれは問題にならない、豫定の時間になると矢野茂君によりて開會せられたが、祝辭演説として神道の柴田禮一君が、原稿を前に置いて朗讀したけれども聲が低くて少しも分らなかつた、佛教側の土宜法龍君は辨論は流暢熟達したものだが、自己信條の眞言教義を説くに努めたので、簡單なれ通佛教なれと彌次られて論調の整はなかつたのは遺憾であつた、基督教の小崎弘道君は、全く牧師的口吻で宗教の社會的活動

日蓮は法華經のゆへに度々所をあらはれ、戦ひをし身に手を負ひ、弟子等を殺され兩度まで遠流せられ、既に頸に及べり、是偏に法華經の御爲なり



の方面を説いたのはよかつかが、あまり低聲であつて  
 群衆は持て餘して居つた様に見うけた、井上哲次郎博  
 士は例の軽快流暢の辯を以て、教育の獨立神聖を叫  
 び、政治家の敗徳を攻撃したなどは稍や痛快であつた、  
 坂谷東京市長の演説は、本誌前號に掲載して置いたが  
 思想家の會合は時代の趨勢であると論じ、確かに會衆  
 の心を動かすものがあつた、兎に角一番の上出来であ  
 つたことは傾聴と拍手によりて證明し得らるゝ、食卓  
 演説では床次總裁の感慨的句調が、いたく一同の士氣  
 を作興し、神道の麻生某は北海道の鐵道講演の披露な  
 どして簡單なれと注意の拍手をあびせられ、大石正巳  
 君は入道頭を壇上に運んで盛んに政府者の攻撃をやつ  
 た、何かの鬱憤があると思える、外國人ケルン氏の雄  
 辯は真に堂々たるものであつた、また其所論も一通り  
 の筋があつて傾聴すべき價ありと認め、江原素六君  
 は知識を無視せる宗教の信仰は現代に用がないと云ふ  
 ことを、昔話を引いて現代迷信に對して痛罵をあびせ  
 た、井上博士は再び立つて明後年開催の世界宗教大會

を豫告し、日本の思想家は紙幣では協力することが出  
 来ないけれども、各人の頭で賛成しようと思ふ愛嬌を  
 振りまいて喝采を博し、坂谷市長の發聲にて、陛下の  
 萬歳を三唱し閉會を告げた  
 ▲精養軒が西洋料理であることは分つて居るが、佛教  
 の或一部には精進料理を説いて別席で行儀よく食事を  
 済したものが多、どう云ふ譯であるか知らぬが、時  
 勢を考へなければなるまい  
 ▲當日小泉日慈師外四名の佛教管長の連名で、宗教  
 と施政、宗教と教育との關係に對する意見書を提出し  
 たが、其理義公正堂々たるにも拘らず、漫りに小理屈  
 を付けて議題となさざりしは、苟くも思想家の會合と  
 しては君子的態度を缺く憾みなきにあらずだ、爲道  
 爲國滿腔の衷誠を吐露して意見を提出するものあらば  
 須らく耳を傾け思を潜めて攻究すべきではないか、小  
 見我執に囚はれては思想上の大問題を議する資格がな  
 い、唯だ挨拶演説を聽いて晚餐を共にするのみで、宗  
 教大會を開いた譯ではなかつたらうに (白髮生)

活動史



▲多大の希望を懐いて居つた大正  
 二年も目覺しき成績を擧ぐるを得  
 ないで送ることになつたがされど  
 吾人が一片赤誠の氣を吐いて法を  
 談ずる所下種の後益を與へ得たこ  
 と、信ずる一月以下統一閣を中心  
 として都下各地に講演を開催し其  
 數二百餘回其他少年會労働者慰安  
 會裁縫夜學會免四保護の事業或は  
 七日間に亘りて學者名士を招聘し  
 て國民思想講演會を開き聊か健全  
 なる國民思想を養成するに資する  
 所があつたさらに新らしき三年の  
 天地に於て精力を盡して活躍せな  
 ければならぬ  
 ▲十一月九日日曜講演、野口日主  
 師は宗教と國家政治との關係を述  
 べて日蓮主義の國家觀を述べ本多  
 大僧正の日蓮主義の信仰の熱火燃  
 ゆる所發動して善行美德となるべ

きを説き活動と信仰との接觸點を  
 詳説して信仰の要を論したので何  
 れも其理義に感じて禮拜するもの  
 があつた  
 ▲同月十六日婦人會講演、熊井本  
 光師の品性修養上の所談ありて後  
 本多大僧正は人生觀定まらずんば  
 人自身の進路なきもの團體の共存  
 發展を期し難しと前提し日蓮主義  
 より觀たる人生觀を述べ信仰と人  
 生の交渉を詳説して法悦の感と與  
 へ二階應接室にては茶菓の供養あ  
 りて散會したり  
 ▲二十三日午後二時日曜講演、京  
 藤義庵師道徳の根底は宗教性なり  
 と前提して發源の形式に一致點を  
 認めて懇説し笹川日堂師は日蓮主  
 義より觀たる儒教の性質を説き明  
 かして倫理上の考察を示されたの  
 で聽衆は實踐主義の教の尊とさに  
 深く敬意を表するに至れりと云  
 ふ  
 ▲三十日午後二時日曜講演、三上  
 義徹師は吾人の實生活は信仰の基  
 礎に立つべきを以て述べ井村日威

師は人の運命は自己の力によりて  
 開拓すべきもの信仰は運命開拓の  
 原動力なりと論じ發心歡喜を起さ  
 しむるものがあつた  
 ▲十一月八日午後六時小石川に大  
 道會例會講演あり三上義徹師の  
 底平和の力は宗教に在るを説き純  
 粋信仰を勧められた閉會後七八名  
 唱題の修行にはげんて居るものを  
 見うけた  
 ▲品川兒童會護持會其他各會共に  
 例會を開き下種の妙益を布き信仰  
 を勸發するに努められた  
 神奈川 神奈川在榎本長寺の御  
 會式講演を開催し三上  
 義徹師は人は教に依て訓練せられ  
 ずんば品格を高むるを得ざる旨を  
 懇説し日蓮主義の勤勉力行を學び  
 信仰に來らば満足も安心も進歩も  
 得べきこと疑なしと論じ二時間に  
 亘る講演を試みて何等かの印象を  
 與へた尙ほ同寺檀徒一同は能く寺  
 院の經營に資財を寄附し亦堅き信  
 仰に安住して居るものも見うけた  
 感ずべきことである



東海道

▲中泉十一月九日午後六時中泉町森金太郎氏宅に御會式を營み山本師は明治佛教の大勢より最近宗教家會合の景況に論及し既に信念に入りしものは時代の先鞭者なりと結び池間治作氏會員に對する希望を語り「澤徳太郎氏は唱題の意義を語り「妻や子も智慧も實も身にそはず題目のみぞ死出の道づれ」の一首を詠じ伊藤少尉は信念深きもの必ず忠良の臣民たり得べき所以を論明して講演を終り更に晚餐會に移りて談笑和樂午後十一時散會したり

▲見付十二月廿二日玄妙寺に行ふ遠近より參詣せるもの無慮一萬を數ふるの盛況なり午後七時報恩大法會を奉修し講演開催山本師は無畏の意義より上人が迫害に逢ふも常に苦樂を超越し給ひしは此の無畏の鎧を著せるに因ると論じ吉田師は俯仰天地に恥づざるの心を誠なりと説き起して上人の一代は證據なりと懇諭したれば深大なる感動を興へたり

田音吉小林音吉磯貝真之助橋萬次郎氏等の盡力に成る維持擔持は成績頗る良好にして漸次布教方面に活躍するを得む

大阪

十一月十等東區淡路町美術俱樂部にて天晴會例會を開く國柱新聞山川智應君來阪し同新聞誌友會を兼ねて開きたりしかは誌友大部分を占めたり先づ池田幹事開會の辭を述べ中平清治郎君は誌友としての所感を語り梶木幹事は「聖祖の遺志」に就て信行を論じ誌友山下氏所感演説あり山川智應君は「權實論と人生觀」に就て講演を明かにし餘興には筑前琵琶小松原法難の一節を彈じ午後十一時閉會

▲十一月二十二日午後七時高津中寺町達成寺に於て第二十三次天晴會を開く池田幹事開會を宜し梶木幹事は日蓮主義の輪廓に就て述ぶる所あり中平氏の會員鼓舞の所説あり夫れより本多大僧正は「至生活と日蓮主義」と題し人間生活の實相人生の眞意義宗教の生活等平易

▲十一月二月午後一時吉津村青年會に於て大會を開く吉田布教師は至誠の發動と題して松蔭先生私塾開設當時の景況より現代文明が其至誠に依るもの多きを論明して大に青年の士氣を策勵するものありしと云ふ

▲豊橋十一月二十三日午後二時豊橋稅務署に開く會するもの權藤兩角兩縣隊長細谷稅務署長警察署長谷會員約六十名吉田堅晴師は佐渡に於ける日蓮上人の二面觀を述べ華房文學士は我國の國民道德の本源を論じ國友文學士は儒教の精華は上人一個の上に體現せる所以を明し午後五時閉會尙ほ本年五月國民思想の講演會を開催以來宗教の眞價を求めんとして來會するもの多きを加へたりと云ふ

京都

十一月一日寺町二條妙以石井師の迷信叱咤の法鼓を撃つて覺醒を促がし「十二日」午後一時同寺に報恩會を修し野老僧正の外護者の資格意義を示して一般の内懇切に二時間亘りて講明せらる聽衆二百餘諸聽時移るを知らず何れも感激して法悦に住せるは近來稀有の事なり

▲十一月十二日午後七時南區生玉前町堂三寺に講演開催鷲田顯正氏は日本建國の事實を述べ能仁一十師は健全なる信仰の効果を就て所説あり梶木日種師皇道と日蓮主義の合致關係に就て懇切なる教示をなせり

▲十三日午後七時西高津中寺町達成寺に例會開催鷲田氏は儒教の日本に傳來したる沿革を述べ能仁一十師は人格修養上に於ける偉人の撰擇に就て注意を促がし梶木日種師は儒教の心髓と日蓮主義とは對象存立の原理に於て契合する所あるを説き卓越せる日蓮主義の光明を發揮し感動を興へたりと云ふ

▲二十日午後一時堂閣寺に於て御會式法要を行ひ能仁一十師の信仰の心得に就て法話ありしと云ふ

▲二十日午後七時堺市妙滿寺に講演を開き能仁一十師の前講に次て

省に資し「十五日」千本壽量寺に講演開催武田顯隆師は絶對の權威と眞我との接合點を説いて信仰を勵め石井師は本心の發揮を喚びて佛子の自覺を叫び金光師は實際生活に信仰を加味して希望の生活に住しべきを教へ「十七日」三條岩見邸に公開傳道を催し石井師は人生の舞臺に宗教の信念を加へて活動すべしと説き日蓮主義の光明に浴せしめたりと云ふ「廿一日」京都天晴會秋期大講演會を妙滿寺に開く京華日報記者江羅直三郎氏は人生活動の根據は宗教の信仰權威に依るべしと述べ本多大僧正は現代人の誤れる人生觀を評破し去りて信仰に活きたる日蓮主義の人生觀を詳論し生活の要道を示されたり聽衆三百何れも満足を表し得る所ありしを見る「二十八日」江見師婦人會の爲に説教會を行ふ「十日」午後一時川東本正寺に婦人會を開く金光孝碩師の有益なる講演あり同會は石田富子其他の幹事心を合せて發展に盡し居れり且つ本正寺は石

長州

川崎英照師の日蓮上人の人生觀に就て熱心なる講演あり多大の印象を興へたりと云ふ

▲宗教の宣傳は大なる事業であつて自己の一代には希望の一分だも達し得られぬものは自己の使命は或程度まで遂行し得らるゝてあらうか

十一月九日秋妙蓮寺講演  
伊豆の御流罪に就て 坂井英俊  
信仰意義 坂井英俊  
釋尊出世の本懐 朝倉俊達  
十日秋妙蓮寺に會式法要説教 朝倉俊達  
御會式の修行 坂井英俊  
上人の兩面觀察 朝倉俊達  
十二日三隔了性院講演 朝倉俊達  
在島三年 坂井英俊  
信心の三義 朝倉俊達  
信心の増進 朝倉俊達  
佛子の自覺 朝倉俊達  
佛子の自覺 朝倉俊達  
時代思潮 朝倉俊達  
國民道德の本義 朝倉俊達  
斯の如く教誨開催によりて信仰啓發に資する所あり尙ほ森田師は除隊後布教に熱中し本堂を瓦屋根に改造し庫裡の大修繕を爲し十一月二十七日上棟式を行へしと云ふ感ずべき事なりとす











